

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク⑰

堤 康徳

ヴェネツィアの市場では、アーティチョークの円盤状の基部(fondo di carciofo)だけが水盤に浮かべて売られている。おそらく、ほかの都市ではあまり見かけない、水の都ヴェネツィアならではの情景かもしれない。ヴェネツィア人たちは、これをゆでたり、ソテーにしたりして食べる。



【水に浮かぶアーティチョークの底の部分】

ヴェネツィアでは、春先に、地元の言葉でカストラウーラ(castraura)と呼ばれる、紫色の早生のアーティチョークが好んで食される。サンテラズモ島(Sant'Erasmo)の特産である。この島の名は、聖エラスムスに献納された教会が、8世紀末に建てられたことに由来する。ヴェネツィアのラグーナにおいて本島の次に大きなこの島の住民は、ほとんどが農業に従事している。このため、サンテラズモ島は「ヴェネツィアの菜園」とみなされているという。農作物のなかでもとりわけ有名なのが、このカストラウーラである。

建築史家、陣内秀信氏の著書『ヴェネツィア—水上の迷宮都市』にも、「ヴェネツィアの四季」と題された一節に、この野菜のことが紹介されている。

春を告げる、ヴェネツィア独特のものがある。まずは、ラグーナの地元でとれるカルチョーフィ(アーティチョーク)の一種「カストラウーラ」だ。塩水を吸って育つから、特有の風味がある。居酒屋で、彼らご自慢のこの珍味を注文すれば、もう地元の連中の仲間に入れてもらえる(講談社現代新書、1992年、pp. 69-70)。

この一文を読んだだけで、誰しも、春のヴェネツィアを訪れたくはならないだろうか？

サンテラズモ島では4月の始め頃に最初のアーティチョークが摘み取られる。これがアーティチョークひと株の頂点に生(な)る紫色のつぼみ、カストラウーラである。その両側に生る20個ほどのつぼみの成長を促進するため、最も早くこのカストラウーラを摘むのだという。私は残念ながら、カストラウーラを食べたことがない。これを使ったレシピも数多くあるようだが、春の到来を告げる柔らかく新鮮な野菜だから、生のままサラダにするのがいちばんおいしそうだ。きっと、プロセッコのつまみとしては最高の一品だろう。

カストラウーラに舌鼓を打ったかどうかは別に、カルヴィーノがヴェネツィアという都市に魅せられていたことはまちがいない。カルヴィーノは、幾度となくこの町を訪れる機会があったことだろうが、とりわけヴェネツィア映画祭とのかかわりが深い。1950年代に作家は何度かヴェネツィア映画祭を取材し、『Cinema Nuovo』誌に寄稿している。また、1981年には、映画祭の審査委員長も務めた。映画祭開幕直前の1981年8月23日付『La Stampa』紙に、カルヴィーノのインタビュー

記事が掲載されているが、その冒頭のやりとりからも、ヴェネツィアを訪れること、そして、映画祭に審査員として参加することへのカルヴィーノの期待感がうかがえる。



【カストラウーラ】

記者「ヴェネツィア映画祭の審査員になることを、あなたはうれしく思われますか？」

カルヴィーノ「ヴェネツィアに行くことはつねに私の喜びです。吹き替えのないオリジナル版の映画を見られることも楽しみです。これはイタリアでは不可能なことですから」(Italo Calvino, *Sono nato in America... Interviste 1951-1985*, Mondadori, 2012, p. 465)

カルヴィーノがヴェネツィアについて語った興味深いインタビューがもうひとつある。1968年4月9日付のヴェネツィアの日刊紙《Il Gazzettino》に掲載された、「『彼らの』ヴェネツィア：水上都市の元型とユートピア」(La «loro» Venezia. Archetipo e utopia della città aquatica)と題された記事だ。カルヴィーノは、ヴェネツィアの住居に特有の「運河に面した扉が、ある特定の水路とはなく、すべての水路、すなわち、地球全体を包みこむ液状の広がりにつながっている」(Ibid., p. 140)と指摘したうえで、このように無限の世界へと開かれた水路を交通のかなめとするヴェネツィアに、未来都市の元型を見ているのである。「ヴェネツィアは、過去の都市であるだけでなく、未来の都市なのか？」というインタビューの質問にたいするカルヴィーノの答からも、それは明らかだ。

まさにそのとおり。ヴェネツィアには、ひとつ失うものがあります。都市におけるその単独性

を失うでしょう。いずれ世界はいくつものヴェネツィア、あるいは、いくつもの超ヴェネツィアであふれるからです。そこでは、さまざまな高さの多様な交通網が重なり合い、結び合うこととなります。航行可能な運河、ホヴァークラフトのための通路と水路、地下や水中の鉄道、あるいは高架式鉄道……ヴェネツィアの未来はこのような展望において見なければなりません。歴史的、芸術的な魅力のなかにヴェネツィアをとらえることは、有名ではあっても限られた一面を見ているにすぎません。ヴェネツィアが空想にはたらきかけるさいの力は、ユートピアに隣接した、生きている元型の力なのです(Ibid., p. 142)。

ここで興味深いのは、20世紀初頭の未来派の建築家たちが描いた未来都市の見取り図と、カルヴィーノのそれが、たとえ両者に直接的な接点はないにせよ、部分的に重なり合う点である。両者ともに、住居と直結し、なおかつ水陸空を覆う多元的・重層的な交通網を基盤とする、世界に開かれた未来都市を思い描いたとするならば、ただし両者は、ヴェネツィアのとらえ方が対照的だ。ヴェネツィアは、「懐古主義的ヴェネツィアに反対」なる宣言を1910年4月に発表した未来派の創始者マリネッティによって、過去の文化遺産に固執して停滞するかに見えるイタリアの象徴とみなされていた。それにたいしカルヴィーノは、未来都市建築の可能性を、ほかでもないヴェネツィアから構想したのである。

このインタビューから4年後の1972年にカルヴィーノが発表した小説『見えない都市』は、ヴェネツィア生まれの商人、マルコ・ポーロが主人公だ。フビライ汗の寵臣となったマルコが、数々の空想都市について皇帝に報告するこの小説には、彼の故郷ヴェネツィアについてのやりとりもある。夜ごとマルコは、自らが見てきたという都市について、皇帝が眠くなるまで語り聞かせるのが習慣だった。ところがある夜、マルコがいくら語っても、フビライはいっこうに眠気を催さず、ついに夜明けを迎える。そして、レパートリーが尽きて音をあげたマルコが言う。

「陛下、もはや私の知るすべての都市を語りつくしました」

「おまえが話していないところがひとつある」
マルコ・ポーロはうなだれた。

「ヴェネツィアだ」と汗は言った。

マルコはほほ笑んだ。「ほかのどこかを私が語ってきたとでもお思いでしたか？」

皇帝はまばたきひとつしなかった。「だが、その町の名をまだおまえから聞いていないぞ」

マルコは言った。「ある都市について私が語るときはいつも、ヴェネツィアの何がしかについて話しております」

「余がほかの町のことをおまえに尋ねるときは、それらの町のことをおまえに語ってほしい。ヴェネツィアのことを尋ねたら、ヴェネツィアについて語れ」

「ほかの都市の特質と区別するため、暗黙のある最初の都市から私は出発せねばなりません。私にとって、それがヴェネツィアなのです」

「それならば、おまえの旅の話をみな出発点から語り始めなければなるまい。ヴェネツィアがどんなところか、おまえの覚えていることをいっさい省かずに、ありのまますべて述べるのだ」

湖面にはかすかにさざ波が立った。宋代のいにしえの王宮の銅の反映が、湖面に浮かぶ木の葉のように閃光を放ちながら砕け散った。

「記憶のなかのイメージは、いったん言葉によって定着させられると、消滅してしまいます」とポーロは言った。「おそらくヴェネツィアのことを、私が話せば、いっぺんに失いそうでこわいのです。あるいは、ほかの都市のことを語りながら、私はすでに少しずつ、ヴェネツィアを失ってきたのかもしれない」(Italo Calvino, *Le città invisibili*, Oscar Mondadori, 2011, p. 86)

カルヴィーノはおそらくいくぶん皮肉をまじえながら、このヴェネツィアをめぐる一節に、「記憶の初期的な元型への回帰を見出した精神分析的な批評家たちがいる」(Italo Calvino, *Presentazione a Le città invisibili*, op.cit., p. X)と書いている。

深い地底の湖の上に建ち、千の井戸をそなえるイザウラ、運河に多種多様な橋のかかるフ

ィツリデ、水道管のジャングルのような町アルミツラのように、この小説には、ヴェネツィアの面影を宿す幻想都市が登場する。そこには、かろうじてユートピアの残像を認めることもできるだろう。しかしその一方で、空気の代わりに土が充満するアルジーアや、大量に排出される廃棄物によって拡大してゆく都市レオニーアのように、ユートピアとは対極的な地獄の様相を呈する町がある。ユートピアと隣り合わせの地獄のイメージは、『見えない都市』の主要な要素のひとつである。実際に、この作品は、地獄をめぐるマルコの省察とともに終わっているのだ。マルコは言う。地獄のただなかであって、それに苦しめない方法はふたつある。ひとつは、それを受け入れてしまうこと。もうひとつは、より危険で、注意と学習を要するもの。つまり、誰が、そして何が地獄ではないかを見極め、それを永續させ、それにスペースを与えるすべをさがすことだ、と。

ヴェネツィアをめぐる 1968 年 4 月のインタビューで顕著だった、楽観的な未来都市像は、もはや『見えない都市』には見られない。思えば、パリ、そしてプラハの街路がバリケードで封鎖されたのは、このインタビューからまもないことだった。おそらくこれらのできごとがひとつの契機となり、カルヴィーノは、フランスの空想的社会主義者、フーリエの著作をとおして、ユートピアに関する考察を深めてゆくことになるのだ。

1973 年のフーリエをめぐる評論のなかでカルヴィーノは次のように述べている。「もはや誰も、完璧な都市を記述したり、その住民の一日を時々刻々たどろうとは思わない。世界の厚み——と複雑さ——は、私たちのまわりで隙間なく固められてしまった」。「文学のジャンルにおいて、ユートピアは、(ハクスリーやオーウェルのように)反ユートピア、未来の地獄のヴィジョンとしてのみ存続する」(Italo Calvino, *Per Fourier III. Commiato. L'utopia pulviscolare*, in *Una pietra sopra*, Einaudi, 1980, p. 249)。

『見えない都市』が、このような洞察と無縁でないことはたしかだろう。

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

私のイタリア留学記

『初めてのイタリア

～Firenze と Sardegna～①』

平木 奈々子

「あなたの前世はイタリア人ですね」
かれこれ7年ほど前に、前世が見える人がいるらしいよ！と、友人に誘われミーハー心で行った前世占いで言われた言葉。

それまでイタリアを意識したことのなかった私が、イタリアに興味をもったきっかけでした。

私は、これまで服飾関連の仕事をしてきました。その中で、強く感銘を受けたイタリア人のファッションデザイナーさんがいらっやいます。これまでの仕事を一段落させ、自身で仕事を始める前に、是非ご本人にお会いしてみたい！と、初めてのイタリアへ行くことを決めました。

会館でイタリア語を学ぶこと約1年半。2013年4月14日～5月14日までの1ヶ月間、念願のイタリアへ行ってきました。

織物などの手仕事や民族衣装も見て回りたいと考えていた私は、1ヶ月の期間すべてをフリーで行動しようかと考えていました。会館の先生たちに相談したところ、女の子一人で初めてイタリアへ行く、語学もそれほど堪能ではないということであれば、半分の2週間だけでも語学学校へ行くことをおすすめしますよ、とのアドバイスをいただきました。語学学校へ行くことでイタリア語に触れる機会が増えるし、耳も慣れるので学校以外でもイタリア語で話しやすくなる。そして、何か困ったことが起きた時に頼れる人がいるのといないのとでは精神的な負担も大分ちがうから、というアドバイスでした。私は、このアドバイスのおかげで、より充実したイタリアでの日々を過ごすことができました。

今回の滞在にあたり、渡伊前に自分の中で決めたこと。それは、“背伸びをしない”ということでした。というのも、1年半かけて語学を学んだものの、語学勉強があまり得意ではない私は、留学直前になっても、会話はかなりたどたどしく、文法を

理解するために努力はするものの、頭にはなかなか入らず、大丈夫？？というような様子。心は焦るけれど、そんな急に上達するわけもなく、あっという間に留学の日を迎えました。そして、行きの中飛行機の中で腹をくりました。知らない単語や文法を無理に使おうとするのではなく、これまで学んできた単語や文法をフル活用して実際に使うことを意識しよう、と。まだイタリア語を始めて1年半しか経っていないのだから、うまく話せなくて当たり前だ！と、もし間違えても恥ずかしがらないことに決めました。(本当は、うまく話せて間違いもないのが一番ですけどね)

1ヶ月の内の最初の2週間は、フィレンツェのアパートに滞在+語学学校(Centro Firenze)へ、後半は手仕事や工芸が盛んだというサルデーニャ島へ10日間ほど滞在、再びフィレンツェへ戻り数日過ごし帰国、というプランを立てました。

フィレンツェ空港へ無事到着。送迎のタクシーのドライバーさんもすぐに見つけることができ、順調にアパートへ到着。とても気さくな大家さんとシェアメイトに迎えられ、フィレンツェでの生活が始まりました。翌朝、早速学校へ。シェアメイトのアンナ(スイス人)が学校まで案内するよ、とおすすめの通学ルートを教えてくれました。とても温かい心遣いに感謝しつつ、良く晴れたフィレンツェの街並みや風景を堪能しながら、安心して学校へ向かいました。

アンナと別れ、クラス分けの試験。思った以上に難しく、少し落ち込みましたが、これが今の自分の実力だなあと納得しクラスへ向かいました。



【アルノ川沿いを歩いて学校へ】

授業は、日本で既に学んだ内容だったので理解はできましたが、説明もイタリア語で行われる

ので、“説明を理解すること”、“質問したい事項を先生に伝えること”、に一苦労しました。毎日、一生懸命耳を澄ませることで、少しずつ耳が慣れて理解できるようになり、とてもよい勉強になりました。最初は、もうひとつ上のレベルのクラスに入らなかったなあ...、とも思いましたが、日本で習ったことをひとつずつ復習できたことで、焦らず落ち着いて授業を受けることができたし、自分が理解できていないことを再確認できたので、結果的にこのクラスへ入ったことが私にとってベストだったと思いました。

授業中、わからないことがあってもどう質問して良いのかが分からず、最初のうちは辞書を引いて自己解決しようとしていましたが、他国の生徒さんたちがわからないことを積極的に質問していく姿に影響されて、小さなことでも恥ずかしがらずに先生に質問するように心がけました。他国の生徒さんの積極的に授業に参加していく姿勢は、とても素晴らしいなと感じました。

クラスには14~15人のいろんな国籍の生徒がいて、授業が終わってから皆でジェラートやパニーニを食べたりと、年齢や国籍を超えてとても楽しい時間を過ごしました。



【授業の後は、みんなでパニーニ】

授業のない時間は、日本でチェックしていたお店や工房などをたくさん巡りました。フィレンツェ

の伝統的な組紐屋さんや、椅子の張替え職人さん、アンティーク家具を修理する工房、PITTI 宮殿の中にあるコスチュームギャラリー、テキスタイルアートのギャラリーなど。

ひとり行動も多かったのですが、なるべく自分から積極的にイタリア語で人に話しかけるように心がけました。皆気さくで温かい方ばかりで、ゆっくりでもイタリア語で話そうとすると、ちゃんと聞いてくれ、表現方法や正しい発音を教えてくれたり、店の奥を見せてくれたり etc... イタリア人の温かさを日々感じていました。道ですれ違う人にも目が合えば笑顔で挨拶をしたり、イタリアでの生活を積極的に楽しみました。生きたイタリア語に触れている時、理解できない言葉もかなりありましたが、話している空気感に触れて耳を傾けているだけでもとても楽しく、それらは「もっと彼らの言葉を理解できるようになりたい」、というイタリア語を勉強する大きな原動力になりました。

滞在中、何度か同じ店を訪れると、私のことを覚えてくれていて「ナナ！」と声をかけてくれたりと、皆さん本当に温かく、異国の地にいるのに、とても居心地が良いなあと感じていました。

最初の週末は、今回の滞在の一番の目的だったデザイナーさんのお店を訪ねました。アポが取れず、お会いできるかどうかはわからなかった為、手紙を渡すことにし、語学学校の先生に、文章を添削してもらっていました。「ナナコ、この表現の方がより気持ちが伝わると思うよ！」と、いうアドバイスを沢山もらい、素晴らしい手紙が仕上がりました。

手紙を持って、いざイタリア北部の街ベルガモへ。お店の前で傘をたたんでいると、店のドアが開きました。どうぞ、と言われふと顔を上げると、まさかのデザイナーさんご本人。私は、びっくりして、少しの間意識がポカンとしていましたが、あっ！手紙！と、早速お手紙を渡しました。とても喜んですぐに読んで下さり、よかったら一緒にカフェ

イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

に行きませんか？と誘っていただきました。一緒にコーヒーを飲むなんて私にとってはまるで夢のような時間。色々な話をして、次の目的地ヴェネツィアへ向かいました。

電車の中で、夢のような出来事を思い出しては、そわそわしていました。イタリアやばい！（もちろん良い意味で）と、ニヤニヤしながらヴェネツィアへ。翌日、私は更なるイタリア人のサービス精神を知りました。翌日は1日ヴェネツィア観光。ブラーノ島にあるレースの博物館を訪れていた時、電話がなりました。出てみると、まさかのデザイナーさん。「今家族でヴェネツィアにいるんだけど、あなたはどこにいるの？一緒にドルチェでもどう？」と言われ、夢だろうか・・・と再びボカンとなる私。「もちろん行きます！！」、と、待ち合わせたカフェへ向かうと、デザイナーさんがナナコー！と走って迎えに来てくれました。そして、デザイナーさんのご家族と一緒にひと時を過ごしました。帰国前にもう一度おじゃまして、アトリエを見学させていただきました。日本人のスタッフの方にヴェネツィアでの出来事を話すと、「ななこさん、それが彼女だし、それがイタリアだよ！」とのこと。イタリアでは、そんなことが沢山起こる、というのです。やっぱり、この国は素晴らしいなあ、と感ずるのでした。

週末の夢のような出来事は、先生と一緒に考えた手紙のおかげ。学校へ行き、この出来事を話しお礼を言うと、先生はとても喜んでくれました。

学校へ通っている間、先生はもちろん、学校の事務をされている方にも大変お世話になりました。（電車や飛行機のチケットの予約や運送会社の紹介、いろいろな場所を教えてもらったり etc...）学校へ行っていなかったら、ひとつひとつの問題につまずき、こんなにスムーズにいろいろな事が進まなかったと思います。

会館のスタッフのみなさんのアドバイスはとても的確で、イタリアで大変助けられました。

楽しかったフィレンツェの滞在を終え、ここからは気ままなサルデーニャ島の一人旅のはじまりです。

（次回に続く）



【アンティーク家具を修理する職人さん】

（当館受講生）

… 会館 だ よ り …

イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

4/1(火) 11:00～12:30

4/5(土) 11:00～12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

4/1(火) 19:00～20:30

● 梅田：大阪駅前第4ビル

3/31(月) 13:00～14:30

4/2(水) 19:00～20:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

4/5(土) 11:00～12:30 講師：当館スペイン語講師

ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

4/2(水) 13:00～14:30 講師：当館ポルトガル語講師

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp